



山口 馬木也  
俳優  
「向日葵の柩」主演

山口 そうですね、東京にいたら、絵を描いたんですけど、東

ってたり音楽やってたり。あの時、ふと扉を開けて演劇を体験する。そんなのが、一番いい出会いだと思ってるんだよ。劇場って相手をボジティブに受け入れる場所じゃないかな。

衛 アーラで稽古のプロデュースとか見て、僕は、山口馬木也の個性っていうか、新しい面が出てきているなあと感じたんですが。

衛 地方に比べると、東京のもった汚れが浄化される気がするよ。地方に滞在して作品を作ってもらうっていう

きたいって感じに全然ならなかったんですけど、中国に2カ月くらい滞在したときに、すごく絵を描きたい気になって。時間の流れ方が違っていて、時間もあって、ちょっと土地が変わって、人が少なくなったりとか、空気がちょっときれいだったりとか、月がきれいだったりとかするって、何かね、自分の何かが変わって、気がするんですよ、細胞が。今回の役って、またちょっと特殊っていえば特殊なんですよ、僕の中では。でも、ここに来てよかったのは、稽古をやっているうちに、体がちょっとずつ変わってきている感じがしたんですよ。また、絵を描きたくなりましたね。

衛 5年か10年たったら、東京のプロダクションとか劇団とかが、「こんなものを可児でやりませんか？」みたいな逆の売り込みが来てね、「よっしゃ、それやるよ！」っていう創造的な関係が成立したらすごくいいなと思う。

西川 本場に作るよ！今、衛さんが言ってることは、夢物語みたいに見えるけど、5年、いや、もしかしたらも



# 新春対談 劇場のあるまちっていいね

劇場が持つ本来の楽しみを市民と共有し、人生をより豊かにしてくれる舞台芸術の素晴らしさを発信し続ける文化創造センター（アーラ）on シリーズ」に縁のある3人が、演劇や劇場について熱く語りました。



西川 信廣  
演出家  
文学座所属

こと早く起こるかもしれないよ。山口 僕もそう思います。逆輸入って、いいと思います。最近、インターネットで情報が一気に

衛 僕は10万人っていう街がいいなと思う。10万人だと、人と人の関わり方が濃密なんですよ。そこに劇場がある。たくさんさんの部屋があって、使い勝手がいい。利用率が高い。豊かなまちづくりのための拠点です。馬木也さん、可児市で1カ月半生活をしてみてどうでした？

衛 僕もたまに東京に戻るんですが、そうすると、へきえきとするんだよね。人がたくさんいるのに、みんな無関心なんです。他人に対して、可児市に帰ってくると、ほっとする。人と人の関係が本場にあって、子どもたちもあいさつするし、それは、衛 僕もたまに東京に戻るんですが、そうすると、へきえきとするんだよね。人がたくさんいるのに、みんな無関心なんです。他人に対して、可児市に帰ってくると、ほっとする。人と人の関係が本場にあって、子どもたちもあいさつするし、それは、



衛 紀生  
文化創造センター館長兼劇場総監督

山口 一軒家をお借りして一人で生活していたんですけど、いざ住んでみると、みんな知らない人とかでも、朝出会うとあいさつするんですよ。東京に住んでいると、なかなかあいさつなんかしないじゃないですか、知らない人に。だから、可児市に住んでみて、浄化されたような気持ちになりました。



「向日葵の核」のひとつ

山口馬木也さんにインタビュー



Q1: お客さんの反応やご自分の中で手応えはいかがでしたか?

山口: 公演2日目にすごい拍手をいただいたこと、アフタートークにたくさんのお客さんが参加してくださったことで、手応えを感じました。お客さんから生の声を聞いて、どんどん芝居が変わっていくんですよ。舞台上でもお客さんに育てていただきました。

Q2: 今年の山口さんの展望を聞かせてください。

山口: 可児市には恩を感じているので、可児で作ったこの舞台をもっと多くの人に見ていただくためにも、役者「山口馬木也」を大きくしたいですね。

Q3: 可児市民へのメッセージをお願いします。

山口: アーラコレクションシリーズ「向日葵の核」は、可児の空気と可児の食べ物と可児の土地でできた特産物のようなものです。こういうものがこの土地で生まれたということ誇りに思っていたらうれしいです。この作品を東京や全国に持って行って成功させることで、可児市へ恩返しができるいいなと思っています。頑張りますので、皆さんも成功を祈っててください。

問合先 文化振興課



リラックスムードのアフタートーク

観客数は、8日間で1601人でした。

俳優さんの演技がすごい迫力で、圧倒されました。また、アーラで演劇を見たいと思います。

ala Collection(アーラコレクション)シリーズとは

文化創造センターのプロデュース公演により、10年以上前に舞台化されて評価を得ながら再演されていない作品をリメイクして再評価をする企画です。

東京で活躍するプロの役者やスタッフが可児市に滞在し生活しながら、ボランティアスタッフと一緒に稽古や制作活動を行います。

演劇作品は、通常東京で制作されて、全国へ発信されま

す。

ala Collection(アーラコレクション)シリーズは、可児で制作し、文化創造センターで公演した後、新国立劇場(東京)での公演や全国ツアーを実施します。地域から全国に作品を発信することは、日本初の試みです。

第1回として、昨年11月28日から12月6日まで、芥川賞作家柳美里さんの出世作「向日葵の核」を上演しました。演出は、17年前にこの作品を手掛けた金守珍さん。

柳さんと金さんを出会わせ、この作品が生まれるきっかけを作ったのが、現在の文

ala Collectionシリーズ

可児から全国へ 演劇を発信



金守珍さんの熱い指導

文化創造センター館長、衛紀生さんであったことから、記念すべきシリーズ第1回の作品として、「向日葵の核」が選ばれました。



可児市の中学生もセットのヒマワリ作りに参加

市長のことば

市民の皆さまには、日ごろから文化創造センターをご利用いただき、厚くお礼申し上げます。

文化創造センターは可児市ブランドの発信、可児市での文化芸術の創造、市民文化の高揚ために設置したものです。

これらのコンセプトをより高次元で具現化するため、今回の「向日葵の核」をはじめとする今後のアーラコレクションシリーズを、地方からの提案として全国に発信していきます。

そして、これをもとに市民の皆さまに対して、日常的に質の高い文化芸術に触れ、また楽しむ機会を創出してまいります。

また、今後の文化創造センターの役割として、教育・福祉・医療など、市民生活になくはない分野に対しましても、アウトリーチやワークショップなどを通じて文化・芸術の提供を行いながら、より良いまちづくりに寄与してまいりますので、ご期待いただきますようお願いいたします。

滞在型による演劇制作

今回の「向日葵の核」では、キャストのうち山口馬木也さんをはじめ7人が、市内の3軒のお宅にホームステイをしながら制作を行いました。

受け入れていただいた皆さんには「息子が増えた気がしてとても楽しいです」「皆さんのいい子ばかりで幸せな気分です」「舞台が終わっても、そのまま居てもらえませんか」など大変喜んでいただきました。またキャストには「とても楽しくて、チームワークも良くなります」と、こ



主要キャストによるイルミネーション点灯式

ちらも好評でした。休日にはドライブと一緒に出かけるなど、可児市での滞在を満喫していただいた上で、の大成の制作、公演となりました。

皆さんの声

「向日葵の核」を見た皆さんに感想をお聞きしました。在日韓国人の友人とオーパラップしました。子どもころのさまざまな出来事を思い出して泣きました。柳美里さんの自伝的作品だと聞きました。壮絶なストーリーに衝撃を受けました。とても重い内容なのに、最後のヒマワリ畑のシーンなぜか栄敏が救われたような気がしました。今まで演劇を見る機会がなく、今回初めて見ました。